

教授就任のご挨拶



このたび、平成28年4月1日付

けで鹿児島大学大学院医歯学総合研究科生殖病態生理学分野(産科婦人科)の教授を拝命しました小林裕明と申します。この場を借りまして鹿児島県医師会の先生方にご挨拶させていただきます。

私は宮崎で生まれ育ち、宮崎西高・理数科卒業後は九州大学に進学しました。昭和60年の卒業と同時に同学産婦人科に入局し、2年間の研修の後、大学院(生体防御医学研究所細胞学部門・馬場恒男教授)に進学し、抗がん剤のドラッグデリバリーシステムに関する研究を行いました。大学院在学中にがんの悪性化・転移研究が専門のRobert Kerbel教授の論文を読み、その研究内容に魅かれ大学院卒業と同時に同教授を訪ねてカナダ・トロントに2年間留学しました。平成5年の帰国後からずっと大学勤務で今日に至っておりますので、学外出張は研修医2年目の10か月のみという、医師としては非常に偏った経歴となってしまいました。しかし、毎年新しい教室員と触れ合えたこと、学生勧誘を通して多くの後輩(他科の医師となった学生さんも含めて)と仲良くなれたこと、基礎的研究や先進医療

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科
生殖病態生理学分野
教授 小林 裕明

に関われたこと、等々はそれを補って余りあるほどの喜びでした。

留学から帰国後に着手した婦人科がんの研究に関しては、基礎研究としては、抗癌剤耐性機構、血管新生因子、腹膜播種に対する遺伝子治療などの研究を行い、多くの大学院生の学位論文を指導してきました。特に後者の、カルポニンという細胞骨格蛋白質の遺伝子を組み込んだアデノウイルスベクターを腹腔内投与し、がん細胞と腹膜中皮細胞の両面から卵巣がんの腹膜播種の制御を試みるという遺伝子治療の研究成果では、第7回(平成16年度)の神澤財団医学賞を頂きました。臨床研究としては、子宮頸がんのセンチネルリンパ節の術中生検をもとにリンパ節郭清の省略を試みる試験(2002年～)、浸潤子宮頸がん患者に対する広汎子宮頸部摘出術という妊孕性温存手術の開発に関する試験(2005年～)、ダヴィンチシステムによる子宮がんロボット手術の臨床試験(2013年～)などを行ってきました。前2者の臨床試験に関しては、子宮頸がん患者の術後下肢リンパ浮腫の回避や根治術後の妊娠・出産を可能としたこと、およびそれらの新規医療技術の普及に貢献できたこと、などの成果で医療・介護・

教育研究財団から第8回(平成25年度)ふくおか「医療活動功労賞」を受賞しました。

平成26年4月から、当時教授であられた堂地勉教授にお誘いいただき、鹿児島大学へ異動しました。この度、永田行博前々教授、堂地勉前教授が築きあげてこられた産婦人科教室を引き継がせて頂くことになったわけですが、光栄でありますとともにその責任の重さに身の引き締まる思いです。皆様もご存じのように、産婦人科医師不足の問題は地方においてはより深刻で、年々悪化しているのが現状です。10年後の産婦人科医師数の県別予測値で、残念ながら鹿児島県は1割以上減少するであろうと予測された11県の中に入っています。県内の日本産婦人科医学会の会員数は1977年の215人から2014年には128人へと激減していますし、県内で出産を取り扱う医療機関はここ4年間で9施設も減り、現在44施設しか残っていません。特に鹿児島市外における減少は深刻で、産婦人科医一人当たりの年間分娩取り扱い数は全国平均が105件であるのに対して、出水医療圏は416件、肝属は281件、始良・伊佐は244件等々、非常に多い数となっています。しかも50歳以上の先生方が多いので、今後更なる分娩施設の減少が懸念され、県内の産婦人科医師を増やすことは喫緊の課題です。教授を拝命するにあたり私に与えられた命題の一つは、鹿児島県で働く産婦人科医師を増やし、県内の産婦人科施設に派遣することだと思っています。学生・研

修医のみならず、他県の産婦人科医にも「鹿児島の産婦人科医になって！」を口癖に日々勧誘しています。有難いことに鹿児島県からは従来より、産婦人科医を目指す医師・学生に対する奨学金などの助成を頂いておりますが、加えて本年度は“はやぶさプラン”という医師・助産師・看護師不足対策基金も創設され、当教室に入局してくれた医師3年目を対象に1年間の助成を頂けることとなりました。産婦人科医となってまだ収入が安定していない初年度に毎月5万円の助成を頂けることになり、浄財をご寄付下さった皆様にはこの場を借りて深く御礼申し上げます。

若き産婦人科医が増えることこそが今後の鹿児島の産婦人科医療を救い、発展させていくわけですが、平成29年度より始まる専門医機構による新専攻医プログラムが、地方の産婦人科医増加に貢献するかは全く未知数です。すくなくとも“鹿児島の産婦人科研修は充実しているし、専門医になっても素晴らしい未来がある”と感じて鹿児島県のプログラムを選んでいただくことが重要ですので、今回、鹿児島市立病院産婦人科の上塘正人部長に相談して、大学同様、基幹施設の申請をしていただきました。その結果、鹿児島県の産婦人科プログラムは2つ基幹施設からなり、かつお互いが相手の連携施設でもありますので、強固な研修協力体制のもと大きな裾野をもった研修施設の集団(ネットワーク)を形成することができました。このプログラムを選択してく

れた研修医たちは自由かつ柔軟な選択肢をもって産婦人科専門医を取得していくこととなります。もちろん、専門医取得後もお互いの病院を行き来するサブスペシャリティ研修も可能としましたので、“オール鹿児島”で産婦人科医を増やす体制ができつつあると思います。

もちろん、私の専門分野である婦人科腫瘍の分野に加えて、周産期医療、不妊内分泌、女性ヘルスケアという産婦人科

の4つのサブスペシャリティ分野の臨床と研究の充実も私に課せられた重要な使命ですので、教室員が増えて大学院生が毎年誕生していくような時代を一刻も早く迎えるべく努力して参ります。鹿児島県医師会の皆様には今後ともいろいろとご迷惑おかけするかと存じますが、ご指導ご鞭撻のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

お知らせ

鹿児島県医師会報は、鹿児島県医師会のホームページの「会員向け」のページに掲載しております。

会員サイトをご覧になる際にはIDとパスワードが必要です。

県医師会会員で、IDとパスワードが不明な方は県医師会医療情報課迄メール又はお電話下さい。

なお、「医療機関情報検索サイト」に変更が生じた場合は、随時受付しておりますので医療情報課までお知らせ下さい。

ホームページアドレス : <http://www.kagoshima.med.or.jp/>

e-mail : densan@kagoshima.med.or.jp Tel : 099-254-8121